
とある科学の球技大会

あっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の球技大会

【Nコード】

N 6 6 2 2 G

【作者名】

あつち

【あらすじ】

1年に1度の、球技大会。そんな大会で、どんなものが繰り広げられるのだろうか

プロローグ（前書き）

初心者なんで、間違いなどあったら、教えていただけると、幸いです。

プロローグ

「不幸だ。」ポツリとつぶやくと、上条当麻はだらだらと運動用の服に着替えた。

「球技大会って・・・小学生かよ。しかも常盤台中と・・・ってかてるわけねえだろ！」

球技大会といってもただのではなく、超能力ありというものである。なので気を抜いていると死ぬといううわさもあり、今の2年も、常盤台中とやり完敗したというのだ。実のところ、この大会は強制ではなかった。かなり危険だから。しかし、現実には甘くなく、

とある中学生には、何億という電流で脅され、先生からは上条ちゃんとは馬鹿だから

強制出場ですよーといわれ、仕方なく出場することになったのだ。

はああ、とため息をつくとき、「しかたないぜい、元気出すにゃー力ミゃん」

と、隣から声がした。彼は、土御門元春という名の魔術師だ。今は科学サイドにいるが、

本当は、魔術サイドの人間で、スパイだそうだ。しかし今は、科学の力リキュラムをやっていたため、魔術は使えなくなってしまったらしい。着替え終わった上条は、

グラウンドに向かっている廊下を酒を飲みまくったおやじのように歩いていると、

茶髪の女の子―御坂美琴が立っていた。「ふふふ、あのときの約束わすれたんじゃないでしょうね？」不吉な笑みを浮かべた。上条は、ふええ？と寝起きのようなりアクションをした。そういえばと思いついた。たしか・・・「勝つたら言うことを聞く・・・だったか？」とたずねるが、そんなことを聞く前に行ってしまった。「ったく。」とつぶやくと、グラウンドに向かって歩いていった。

第一章 抽選会と「最初の闘い」（前書き）

また早めに書いてみました。楽しんでいただければ幸いです。

第一章 抽選会と「最初の闘い」

まずは抽選会から始まった。抽選の仕方は、チーム代表が数字の書いてあるボールを、

引くというものだ。いたって気楽そうに聞こえるが、並々ならぬプレッシャーをうけるのだ。なにせ、引いたものによっては一回戦目で負けてしまうからだ。

ほんとうは、すぐさま負けてこのグラウンドから立ち去りたいのだが、

小萌先生が、「準々決勝まで行けば補習は無しです。た・だ・し、それ以下の場合は、二倍ですよ。」と、女神のささやき。このまま帰っては、冬休みがなくなるところか、インデックスに食されるだろう。だから、何が何でも準々決勝まで行かなくてはならないのだ。

出場チームは、16チーム、何の競技かというと、サッカー、キックベース、ドッチボール

の三種類だ。どれかをコイントスで決めることになっている。上条は、どの役にもならなかった。正式に言うとなれなかった、になる。なにせ、かなり運が悪いからだ。

キャプテンは、土御門。ポジション決めは吹寄制理などと決められていったが、上条含める男女2〜3人が何もやらないことになった。ちなみに、吹寄制理は、推薦でこの大会に参加することになった。

あまり嫌がってはいなかったが、喜んでいる様子も見られなかった。抽選が始まり、土御門が引いたのは3番だった。幸運なことに、御坂率いる「超電磁砲」チームは15番を引いたそうだ。しかし、喜んでいいるのもつかのま、最初の対戦チームは、

霧島夏美率いる「絶対等速」チームだった。名前のとおり、霧島夏美は「イコールスピード」

という技を使い、すでにレベル4までに上りつめていた。イコール

スピードとは、投げたものが、それが壊れるか能力者が力を解除するまで、同じスピードで進む。しかし、めちやくちや早いものには使えないらしい。それでもやはり脅威だ。試合は、すぐに始まった。競技は、コイントスで、霧島がドッチボールを選んだ。「これであたしたちの勝ちよ。ドッチボールと決まった時点であなたたちに勝ち目はないわ。一回戦は楽勝ね。」余裕をかまされ、いらつときた上条は、「あんたたちに負けるわけねえだろうが。こっちは、頭がいいやつはすくねえけど、運動神経はバツグンだぜ。大切に育てられてきたお嬢様なんざにまけたら、恥だろうがよお。」「なにむさくるしい男がギャーギャー騒いでるのかしら」と霧島が言うと、吹寄がうんうんとうなずく。「なにがむさくるしい男だ。お前なんかゆうずう聞かなくてみんなに迷惑をかける性格だろ。」と上条が言うと、後ろの女子がうんうんとうなずく。「なんですって」「なんだと」

磁石のように反発しあう二人をスルーして試合は開始された。最初から、ジャンプボールで霧島に取られてしまった。霧島はぜえぜえ、はあはあ、いいながら「はあはあ。ふっ、ふん。どうせあなたがな」と言おうと、あたしたち勝ちに変わりはないんだから。いくわよ。イコールスピードっっ！」ボールはまあまあの速度で飛んでいった。「どっ、どうよ？これならとめられ・・・えっ!？」驚いたのは当たり前、イコールスピードがとめられたからだ。もちろんとめたのは、上条の右手―幻想殺しだった。「はっ。さっきまでのよううはどこえいったのかなあゝ？レベルゼロの、かみじょうちゃんにとめられちゃうなんて」。ほんとにレベル4？」霧島は、驚きの表情をうかべたまま、ひざを地面に付けた。「そっ、そんな・・・」

霧島のチームの人たちも、あの人のもとめられたのに、勝てるわけがない。

戦意喪失したチームなど、意外と体育会系ぞろいのチームだった上条のチームにとって、へでもなかった。ここから1分強程度で、「

絶対等速」チームが負けたのは、まぎれもなかった。

第2章 休憩タイムに・・・

御坂は、見学用のいすに座っていた。あまり休憩室は落ち着かないのだ。

目の前には、最先端の、強化フェンスがどこしてある。しかし、ステッカーの注意書きには、レベル4までの特殊・物理攻撃にしか対応しておりません、と書いてある。

レールガンぶっ放したら簡単に壊れちゃうんだろうな、なんて思っていたら、入り口のほうから、霧島夏美が入っていた。「こんにちは。こんなに早いつてことは、あの馬鹿に勝ったの？」と問いかけたがうつむいたまま、首を横にふった。「うそっ！」驚いてフェンスの向こうぎしにある一回戦目の第2ブロックのフィールドを見てみると、上条と土御門が、ハイタッチして喜んでいた。御坂が驚いたのは当然だった。常盤台中は、上条の学校とは違い、先生が勝手に優秀な生徒を選びチームを作成してしまつたため、低くてレベル3までの人がそろっているはずだ。それなのにもかかわらず2分で終わってしまうなんて、「あいつらそんなに強かったの？」また霧島は首を横にふった。「止められたんです。しかも、レベルゼロの上条とかゆうヤツに。しかも片手ひとつで。」みさかは、ああ、あの馬鹿のせいか。と思いつつ「大丈夫だよ。あの馬鹿にはあたしのレールガンもきかないもの。だから気にしないほうがいいわよ。」と慰めてやった。が、霧島はぐったりしたまま、休憩室まで歩いていった。それと同時に、上条は御坂にきづいたのか、見学室に入ってきた。

「おう、どうだった？もしかして心優しい方が、一回戦目で今大会の、最大の敵を倒してくださったのかな？」「はあ？あたしが負けるとでも思ったわけ！？」御坂の、おでこのあたりから青白い火花が飛んだ。上条は、ひい！と後ろに下がると「い、いや、別に御坂さんが、弱いとかいいたいのではなくて、ひい！！！！ちよ、ちよっ

ときれてらっしゃいますかつて、んぎゃあ！」最後の電撃は、上条の右手がガードした。「こういうときぐらい直撃しなさいよ！」「んな無理なこと言われたって、うわっ！大体その要望受けたら死にますけどね俺！」二人はこんなことを１０分ほどやった頃に、休憩室から、白井黒子が出てきた。

[illegible]

白井黒子は、一瞬で近くまで来て、上条の頭にドロップキックした。

「ぬぐあわあゝ」自分的には５メートルぐらい吹っ飛んだと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6622g/>

とある科学の球技大会

2010年10月8日11時34分発行